

別紙 1-1

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	甲	第	号
------	---	---	---	---

氏 名 浅井 宗一郎

論 文 題 目

The impact of cervical lymph node dissection on acid and duodenogastroesophageal reflux after intrathoracic esophagogastronomy following transthoracic esophagectomy
(頸部リンパ節郭清が食道癌術後十二指腸胃食道逆流に及ぼす影響)

論文審査担当者

名古屋大学教授

主 査 委員

小寺 泰弘 


名古屋大学教授

委員

蔭山 光弘 


名古屋大学教授

委員

曾根 三千彦 

名古屋大学教授

指導教授

柳野 正人 

論文審査の結果の要旨

別紙 1 - 2





今回食道癌における頸部リンパ節郭清が食道癌術後の胃十二指腸逆流に及ぼす影響について胃管再建胸腔内吻合症例において胸腹 2 領域郭清群と頸胸腹 3 領域郭清群での食道癌術後の逆流症状、内視鏡所見、24 時間 PH、ビリルビンモニターを比較することで検討した。検討の結果、頸部リンパ節郭清によって逆流症状に差はみられなかったが、胃酸逆流、胆汁逆流、逆流性食道炎の増加がみられた。この理由として頸部リンパ節郭清によっておこる残食道の除神経と癒痕化が蠕動運動を低下させること、また前頸筋群の剥離が、これらの筋肉の癒痕化と硬直を引き起こし、それが喉頭挙上を妨げ嚥下機能を障害して嚥下圧が低下し、残食道のクリアランスが低下することが原因となると考えた。以上より頸部リンパ節郭清で恩恵を得られる食道癌患者の選択が必要であると考えた。

本研究に対し、以下の点を議論した。

1. 本研究では 3 領域郭清群において胃酸逆流、胆汁逆流、逆流性食道炎が多くみられたが症状においては差がみられなかった。しかし有意差はみられないものの重度の逆流症状は 3 領域郭清群で 1 例みられていた。胃酸、胆汁逆流の暴露時間が長ければ症状が重症化する可能性は示唆されるものの、2 領域郭清群では胃酸、胆汁逆流いずれもみられないにもかかわらず逆流症状を呈している症例もみられることから、本研究の胃酸逆流、胆汁逆流の定義にあてはまらないほどの逆流でも症状がみられることがあると考えられた。
2. 全例胃管再建であるため逆流症状の有無に関わらず、高侵襲手術後の潰瘍予防に基本的には PPI を投与している。また本研究では術後約 1 年の時点での逆流をみているが、その後は術後定期再発有無を調べるための上部消化管内視鏡検査で逆流性食道炎などの所見も経過をみている。
3. 胃食道逆流の評価としてスコアリングできる Quest 問診票や F スケール質問票があるが本研究では生活に影響を及ぼすかどうかで軽度と重度に分類した。本研究では逆流症状に差はみられなかったが、スコア化して cut off 値を設定して軽度と重度に分類することで有意差が出る可能性は否定できないと考えられた。

以上の理由により、本研究は博士（医学）の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号	氏 名	浅井 宗一郎
試験担当者	主査: 小寺泰弘  副査: 藤成 亮三  副査: 曾根三千彦  指導教授 柳野 正人 			
(試験の結果の要旨)				
<p>主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 胃酸逆流や胆汁逆流と実際の逆流症状の関係について 2. 逆流症状がある群に対しての術後のアプローチについて 3. 逆流症状の評価にスケールを用いているかについて <p>以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、腫瘍外科学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。</p>				